



Physicist Meets Economist

神戸大学 経済経営研究所

講師（研究機関研究員） 熊本 真一郎

私の研究分野は物理学である。つまり私は、経済・経営学の研究所に所属する研究者としては珍しい『物理の研究者（Physicist）』である。研究分野は素粒子物理学と社会・経済物理学であり、これらの理論的研究に取り組んでいる。ちなみに出身学部は物理学科、大学院は素粒子論専攻で、これまで物理の研究室にしか所属したことがなく、大学入学以来ずっと物理の世界に身を置いてきた。よって他の世界の事をほとんど知らないまま、2016年6月に神戸大学経済経営研究所に着任した。このような事情のためか、着任してからというもの、物理学と経済学の文化の違いに出くわすことも少なくない。そしてその度に、自分がこれまでいた世界（素粒子論の業界）が、他の世界とは『少し』違う文化・慣習を持っていたことに気付かされる。

最初に思い出される例は、研究会等での服装である。素粒子論周辺の業界では、研究会、物理学会、国際会議等に参加する際の服装は基本的にカジュアルである。私はこの業界に入ってまだ8年程度ではあるが、フォーマルな服装で発表する素粒子論の人をほとんど見たことが無い。「発表者を含むすべての参加者の服装は自由」というのが素粒子論の研究会等での慣習となっているので、必然的にほぼすべての参加者がカジュアルな服装で参加している。もちろん物理の中でも、「発表者は原則スーツ着用」という暗黙のルールがある分野もある。以前、物理学会の地方大会に参加したときに、素粒子論のセッションの教室を出て、近くの物性実験のセッションの教室を覗いたら、ほぼすべての参加者がスーツを着用しており驚いたのを覚えている。おそらく産業への応用が期待されるような分野は、一般企業との関りも深く、大学関係者以外の参加者も少なくないため、フォーマルな服装が求められるのだろう。

次に思い出される例は、教員を呼ぶときの敬称である。素粒子論周辺の業界では、どんなにベテランの教員でも「△△さん」と、さん付けで呼ぶ慣習がある。これは教員同士はもちろんのこと、大学院生が教員を呼ぶときも大抵そうしている。大学に入学した当初、学生は教員を「△△先生」と呼ぶことが多いが、4年生で研究室に所属する頃か、大学院の修士課程に入るあたりで、多くの素粒子論専攻の学生は、さん付けへと移行していく。実際、当の呼ばれる側の教員も、さん付けの方を好む人が圧倒的に多く、「△△先生では

なく、△△さんと呼んで下さい。」と自分で言う教員には何度か会ったことがある。しかし、「△△先生と呼びなさい。」と、その教員本人やその周りの人から言われるようなことは一度も無く、そういう話すらも聞いたことがない。よって、私のような若手研究者が、例えばノーベル物理学賞を受賞した高名な素粒子物理学の研究者を「△△さん」と呼ぶ場面に遭遇したとしても、業界内ではまったく普通のことなので、そこは驚かずに見守っていただければ幸いである。

少し話は脱線するが、このような慣習は、「学生も一人の研究者であり、研究者としては教員も学生も対等である」という考えから生まれたと聞いたことがある。このような考えのもと、素粒子論周辺の業界では、教員と学生、年上と年下等の隔てが無く、対等かつ自由に議論ができる雰囲気が長年大切にされている。それに加え、議論好きな人間が多い業界でもあるので、多くの大学の素粒子論研究室では、各部屋や廊下に設置されたホワイトボードの前で、四六時中誰かが大抵議論をしている。そして、このような日常的な議論は多くのアイデアを生み出し、これこそが研究の中で最も楽しい瞬間であると思っている。

話を戻すと、これらの文化・慣習の例は物理学の中でも主に素粒子論周辺に関するものだが、物理学全体としても経済学との違いは存在するし、さらに考え方や問題へのアプローチ法も違うという事も予想できる。もちろん、そもそもそれぞれの解析対象が物理現象と経済現象という大きな違いはあるのだが、それだけでは説明できない本質的な思想の違いのようなものがあるのではないかと私個人は考えている。実際、この事は研究所に着任してから周りの方たちと様々な議論をする中で私自身が感じたことでもあるし、周りの方たちも逆に私に対してそのように感じているかもしれない。

そして、このように文化や考え方の違う者同士が日常的に議論できる環境は、そうでない環境と比べて、新しい研究を生み出す可能性が高いと私は思う。これは研究に限らずより一般的に、「性質の異なるもの同士の出会いは、全く新しいものを生み出す可能性が高い」と言えるという事ではないだろうか。それはある種の経験則のようで、実際、私たちはその実例を既にいくつも知っている。例えば、世界三大料理の一つのトルコ料理はアジアとヨーロッパの食文化の混ざり合いにより生まれたし、音楽の一大ジャンルのロックは、ブルースとカントリーミュージックという二つの異なる形態の音楽の融合により生まれた。また、多くの人を夢中にさせる物語の類型の一つである『Boy Meets Girl』も、少年と少女が出会うことによって、その世界の平凡な日常が非日常へと変貌し、そこから物

語が誕生するのである*1。これらの他にも例を挙げれば枚挙に暇がないが、その数々の例を思い出す度に、徐々にこの経験則が成立しているような気がしてくる。

さて、Physicist の私は、この経済経営研究所で幸運にも、多くの Economist と出会うことができた。まさに『Physicist Meets Economist』の物語と言える。この原稿を書きながら、すっかりこの物語の主人公気分になっている私としては、この状況で新しい研究が生まれることを期待せずにはいられないし、一方、物理の研究者としての私は冷静に上記の経験則が本当に正しいのかを、この身を使って実験したいと考えている。この物語兼実験は、理論が専門の私には先を読むのが非常に難しいが、主人公の行く末兼実験結果がわかった暁には、いつかこのコラムで報告したいと思う。

*1 『Boy Meets Girl』の例として私たちの世代が最初に思いつくのは、ジブリ映画『天空の城ラピュタ』のパズーとシータの出会いでしょうか。